Meiji Repository
明治大学学術成果リポジトリ / MEIJI UNIVERSITY Academic Repository

Title	表象としての組織
Author(s)	髙木,俊雄
Citation	
URL	http://hdl.handle.net/10291/22110
Rights	
Issue Date	2022
Text version	ETD
Type	Thesis or Dissertation
DOI	

https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/

Meiji University

2021 年 11 月 12 日

「博士学位請求論文」審査報告書

審査委員（主査）　経営学部　専任教授

氏名　　高　橋　　正　泰

（副査）　早稲田大学商学学術院商学部　教授

氏名　　大　月　　博　司

（副査）　西南学院大学外国語学部　教授

氏名　　清　宮　　徹

1　論文提出者　　髙木　俊雄

2　論文題名

（邦文題）

表象としての組織

（欧文訳）

Organizations as Representation

3　論文の構成

本論文は、組織における「表象」についての先進的な研究である。一般的に表象とは、具体的あるいは抽象的な事物を何かで表すことと捉えられているが、本論文で用いている「表象」は、Saussure 以前の言語の考え方のように物事の本質を誤りなく示し真理を示す単なる記号ではなく、何らかの意味を作り出す対象として捉えている。すなわち表象は、その表象の「内容」はあらかじめ定義づけられているのではなく、それが立ち現れる際にその関係性に基づき意味が構築されていくのであり、表象という概念が含意するものは、既に意味がもとから存在していてその意味を単に伝達し、反映するということではなく、むしろ、物事というものはその意味を作り出す実践を意味している。

この「表象」と Blumer が提唱したシンボリック相互作用論や組織シンボリズムに代表されるようなシンボルと何が異なるのか、またそれらでは何が不十分なのかという疑問が生じる。組織シンボリズムの理論は、個人が意味やシンボルの解釈を通じて、行動にどのように関連するかという点が重要となってくる。それゆえ、組織は客観的・技術的合理性を基準とするよりもむしろ、組織のもつ意味や価値体系、組織が生む価値の基準にしたがう解釈的な合理性に依拠したものとなる。したがって、シンボルを通じて構造を相互作用によって再

構築していくことになる。しかしながら、シンボリック相互作用論や組織シンボリズムの議論の中心は、シンボルの意味やシンボルが果たす役割といった関係性に重点があり、シンボルが何のためにいかに生成されていくか、そのシンボルが組織の行為としていかに用いられていくかというプロセスについて十分焦点を当ててはいなかった。表象は組織の実践的行為と切り離すことはできないのであり、また表象を契機として多様な実践的行為が生じ、その中である行為が正統性(legitimacy)を獲得するといことについて十分注意を払う必要がある。

そのため、本論文では「表象」という概念を用いることでシンボリズムなどでは十分に語ることができなかった、いかに生成され用いられるかについて明らかにしている。すなわち、表象はシンボルやディスコースなどを含み、また組織現象は表象を契機として多様なアクターが正統性を獲得するための活動を行い、そしてその結果として何らかの秩序、すなわちコンフィギュレーションが構築されることになる。つまり、組織は、確固たる構造をもっているのではなく、表象が契機となり正統性獲得活動が生じ、その結果コンフィギュレーションとして現れるといえる。

これまでの機能主義に基づく組織の理論とは一線を画す新たなパースペクティブによる組織の研究が 21 世紀に入って盛んに行われるようになり、本論文の研究もこれらの研究動向の一環としてみることができる。

本論文は、このような研究背景から、経営学・経営組織研究における表象の概念を体系的に議論し、そのうえで、経営学・経営組織研究において表象研究がいかに議論されてきたかを概観・分析し、今後の経営学・経営組織研究における表象研究の展開について検討している。

本論文の構成は次の通りである。

序章
1. 問題の提起
2. 本論文の構成
第 1 章　表象研究とパースペクティブ
1. 表象の概念 －表象は行為を伴う－
2. 表象研究の系譜とそのパースペクティブ
3. 小括
第 2 章　組織研究の変遷
1. 社会科学における存在論、認識論、方法論
2. 合理性
3. 組織のパラダイムシフト：二項対立からの脱却
4. 小括
第 3 章　表象とシンボル
1. シンボリック相互作用論
2. 組織シンボリズム
3. シンボルと表象
4. 小括
第 4 章　表象と組織研究：社会構成主義の観点から
1. 組織分析

2.　社会構成主義の概念
3.　表象を契機とした組織行為
4.　具体的な研究アプローチ
5.　小括
第 5 章　コンフィギュレーションとしての表象
1. 表象としての戦略
2. 表象としての技術
3. 表象としての信頼性組織
4. 表象としてのブラック企業問題
5. 小括
第 6 章　表象の組織論の展開
1. 表象研究と記述
2. 組織における表象研究の展開
3　小括
終 章　結論
1　本論文のまとめ
2　本論文の貢献と限界

4　論文の概要

本論文は序章から終章までの 8 章立てから構成されている。

第 1 章では、本論文において重要であり根幹的な概念である「表象」について定義づけることとする。表象は、一般的には知覚したイメージを記憶に保ち、再び心のうちに表れた作用をさすが、この表象するという行為は、既存の概念マップに当てはめるだけでなく、概念マップを書き換えたり、また新たな意味を構築することも生じさせる。そのため本論文では、表象を「ある特定の対象物を鏡のように反映するものではなく、何らかの意味を作り出す対象」(粟谷, 2002: 30 ページ)として捉え、その上で、表象と行為との関係について、表象が組織にもたらす行為、すなわち表象の作用について 3 つ(「秩序化装置」、「馴致化(familiarize)」、そして「正統化(legitimacy)」)の観点から説明を行っている。その上で表象研究の系譜とパースペクティブについて述べている。体系的な表象研究はショーペンハウアーから行われるようになったといわれており、そのためショーペンハウアーが述べる表象について検討を行い、ショーペンハウアーの議論ではアプリオリを前提とした表象で考えた場合、表象は確かに厳然とした秩序化装置として存在するが、一方でそれを踏まえた多様な行為を説明できないという問題を指摘している。そのため、次にフッサールの現象学をとりあげ、志向性を踏まえた多様な解釈としての表象の姿を示し、最後に、表象は個人の中だけに存在するのではなく、社会において成立するという点について、Moscovici(1984)の社会的表象の観点から検討を行っている。

第 2 章では、組織研究がどのような理論パラダイムから成立しているのかから考えていく。Burrell and Morgan (1979)が「あらゆる組織の原理は何らかの科学哲学ならびに社会の理論を基礎にしている」(p.1: 訳 3 ページ)と述べているように、社会科学においては理論的前提なく組織現象を語ることはできないのであるからである。経営学や組織研究においてはメソドロジーがすでに確立されたものとは言えず、そのため本論文では第 2 章におい

て組織研究における理論パラダイムについて検討している。

第 3 章では、これまで組織研究の文脈で語られてきたシンボルと、本論文でとりあげる表象ではどのような点が異なっているのかについて検討を行っている。そのため組織シンボリズム研究の一つの源流であるシンボリック相互作用論(symbolic interactionism)から検討を行い、その上で、組織シンボリズムについて述べ、さらに組織シンボリズムを補完する研究としての表象研究について議論している。

第 4 章では、表象が組織研究においてどのように展開されてきたのかについて検討を行い、機能主義に基づく研究として法則定立的研究について示しつつこの研究の限界について述べ、表象を契機とした実践的行為へと組織研究が変化していることについて明らかにしている。そのうえで、具体的研究方法として、新制度派組織論、正統的周辺参加、アクター・ネットワーク理論について述べている。

第 5 章では、特に、経営学および企業の経営実践において「戦略」、「技術」、「信頼性」、そして「ブラック企業問題」という表象が、実務家及び研究者によっていかに戦略的に用いられてきたのかについて明らかにする。第 1 章でも示しているが、組織における表象の作用の一つとして正統性の獲得が存在する。そのため、ここでは、経営者、管理者、そして研究者がいかに経営学で代表的な表象を用いることで自身の正統性を獲得していくのかについて筆者の調査事例等を用いて説明している。

第 6 章では、前章までで示した「戦略」、「技術」、「信頼性」そして「ブラック企業」のような表象の観点から研究を進展させることは、これまでとは異なった研究アプローチを用いることになる。そのため本章では、表象をきっかけとした実践的な行為を含めた研究アプローチについて記述すると同時に「表象としての組織」の新たな組織モデルについても示している。そこでは単に表象をきっかけとした多様な行為が生じるだけでなく、表象をきっかけとした正統性獲得活動、さらにその正統性を無効化する活動についても記述することができるということを論述することにより、表象を踏まえた新たな組織モデルについても示している。

最後の終章においては、組織における表象の研究の重要性について述べるとともに、本研究では十分に論じることができなかった点と今後の展開可能性について論じている。

5　論文の特質

本論文では、これまで組織の理論では十分に検討されてこなかった「表象」についての先進的な理論研究である。「表象」の概念は、近年組織研究において注目されている研究の一つであり、組織の中で今後ますますその研究の重要性が認識される分野である。従来の組織研究では、「表象」というものについて多くの注目が払われていなかったが、シンボリック相互作用論、組織シンボリズムの理論や社会構成主義、および組織ディスコース、さらに組織の新制度学派の理論的展開を背景にして、表象による組織の正統性の議論を意味の共有や価値の共有といった側面を考慮しつつ組織について新たな研究を展開しているところにその特質をみることができる。本論文は、組織研究のパラダイムの多様化によるこれまでの機能主義に基づく議論の限界をポストモダンニズムという解釈的主義のパースペクティブの影響を受けながら「表象」という概念に着目した先駆的な研究であり、組織研究に新たな理論展開をもたらす研究といえる。

６　論文の評価

組織の研究において組織が実際にどのように現れてくるか、つまり組織の現実の活動から「表象」の概念を持ちつつ組織の研究をおこなった本論文は、これまで研究の主流である機能主義的組織論のパースペクティブから離れ、ポストモダンニズムという解釈主義およびクリティカルなパースペクティブから「表象」の概念を理論的に検討するという組織研究の新たな研究分野を切り開く研究であると評価することができる。また、研究メソドロジーについても、研究パラダイムの整理に基づいて「表象」の組織研究を検討している論文として評価することができる。

他方、本論文にみられるように、「表象」の概念が組織研究を網羅的に十分に検討しているわけではなく、また実践における「表象」の概念の重要性と有用性を指摘するにとどまっていて、この「表象」が実践においてどのように展開され、その重要性が現場で認識されているかについてはさらなる検証が必要であることは、本研究が抱える限界の一つであるともいえる。さらに、今後の研究メソドロジーについても、「表象」の研究を進めていく際の方法論の検討について十分な検討がなされなければならない。

しかしながら、そのような課題はあるとしても、これまで十分に検証されてこなかった組織の「表象」について、研究パラダイムを通しての理論的考察をした本論文の研究価値が失われることはなく、組織における「表象」の重要性とその研究の先駆けとなる研究として、高く評価されるべき論文であるとすることができる。

７　論文の判定

本学位請求論文は、本学学位規程の手続きに従い、審査委員全員による所定の審査及び最終試験に合格したので、博士（経営学）の学位を授与するに値するものと判定する。

以上

主査氏名（自署）＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿